機関（連携先機関）名	北海道大学	
拠点のプログラム名称	境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界	
中核となる専攻等名	スラブ研究センター	
事業推進担当者	（拠点リーダー）岩下 明裕 教授	外 22 名

〔拠点形成の目的〕

境界事象とは、人間が生存する実態空間そのもの及びその人間の有する空間及び集合認識のなかで派生する差異化（つまり、自他の区別）をもたらすあらゆる現象を指し、いわば境界研究（ボーダースタディーズ）はその形成及び変容ならびに紛争回避メカニズムの解明である。現代社会においては、実態空間としては国と国の接点（国境）や民族と民族が対立あるいは協力する様々な衝突点が存在する。そしてそのボーダーに分断あるいはボーダーを跨いで生活する人々はその実態に左右されながらも、ある場所では自他の認識を鮮明に、別の場所ではグラデーションをもって表象する。そして、もとよりこれらの境界は実態も認識もズレを抱え込みながら、歴史のなかで再生産され続ける。本拠点はこのような境界事象にかかわる問題をどのように読み解くかという問題意識を共有しつつ、具体的なエリアにおいて問題の存在を探り、その問題の様態を考察し、解決方法を模索し、その実現に向けて提言をも行う。本拠点がスラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧地域）を軸とした地域研究の成果をもとに、世界に広げようとするのは、冷戦終結後、まさに空間の解体と再編を通じて、実態と表象の双方においてこの境界事象を様々な様態で表出させたのがこのエリアだからである。このエリアとその隣接地域で生じた事象は、ある意味で世界の地域紛争や対立・統合を理解する様々な手がかりを与えてくれよう。

本拠点形成の具体的な目標は、日本では個別研究として未組織のまま進められている境界事象にかかわる研究（ボーダースタディーズ）を、北海道という地の利を活かし、スラブ・ユーラシア地域を中心とした研究蓄積及び人文・社会系の広域・比較にかかわる教育研究の知的インフラに糾合し、総合的な学問複合領域の拠点とすることにある。北大における拠点を梃子に全国の境界研究を集約し、国内ネットワークを創設し、日本における各研究を国際的標準のなかで位置づけ発信する。欧米諸学会とも協力し、世界的なネットワーク形成を主導するとともに、この拠点とネットワークを基礎に、内外の地域にかかわる実践とも連携した次世代研究者及び実務家の養成・教育を行う。

とくに本拠点は、主として言語的、歴史的、政治的制約から研究の「空白地帯」となっている、スラブ・ユーラシア地域（ロシア・中央アジアなど）や東アジア（中国・韓国）で関連研究を組織し、ネットワーク連結のハブの役割を果たす。北大の人文・社会系大学院及び総合博物館の連携により、境界研究に関する教育機能（博物館展示における一般向け教育の推進と普及、大学院における横断型プログラムの創設、全国の若手研究者の育成とサポートなど）を充実させ、日本における当該分野における研究と教育の両面を牽引する。

〔拠点形成計画及び進捗状況の概要〕

北大は日本において境界事象にかかわる研究とその教育を実践する最適なポジションを持つ。第1に地理的・歴史的な意味での境界にあたり、東アジアのみならず（広い意味でヨーロッパにつながる）ロシアなど他地域・他文化との接触前線に立つ。第2にスラブ研究センターという当該地域研究における共同利用・共同研究拠点が存在すること。第3に、スラブ・ユーラシア及び隣接地域のみならず、境界研究にかかわる教育的役割を担うべき人材が、文学研究科を筆頭に各人文・社会系大学院研究科に集約されていること。第4に何よりも研究成果のバーチャルな蓄積と斬新な発信を総合博物館の事業参画によってなしうること、がそれである。以下に、これまでの進捗状況を列挙する。

1) 研究成果の発信

査読雑誌の刊行 Eurasia Border Review（年2回）『境界研究』（年1回）

オンラインジャーナルの刊行（『ライブ・イン・ボーダースタディーズ・』）Webでの情報発信
各種成果の刊行（『国際政治』特集「ボーダースタディーズの胎動」 『日本の国境：いかにこの呪縛を解くのか』北大出版会 など）

2) 教育プログラムの立ち上げ・サマースクールの組織など

「境界研究」など大学院共通科目の習得を通じた博士課程教育プログラムの始動

「境界研究」サマースクールの開設による欧米アジアと国内若手研究者のトレーニング

ボーダースタディーズ・セミナー開催による内外の若手研究者の拠点への結集

3) 国境フォーラムを通じた研究者と実務者のネットワーク作り（2009年根室、2010年対馬・東京）

4) 国外ネットワークとの協力：ABS、BRIT、IBRU、中国辺疆史地研究所、韓国国境研究所など

5) 博物館や映像資料を通じた新たな情報発信：常設及び巡回展示、DVD制作

(総括評価)

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、実効的な進捗があると認められる。

拠点形成全体については、国際協定に基づいた実質的な連携が着実に進んでいると評価できる。特に拠点形成にかかる情報発信として、英文・和文雑誌の創刊などの予定されていた活動に加えて、博物館展示やDVDの作成など、発信力を強化している点が評価できる。

人材育成面については、若手研究者を国際的な共同研究に参加させているものの、本プロジェクトに参加したことの効果が、論文発表や学位取得という点でどのように具体的に現れているのか、今後、継続的なモニタリングを必要とする。特に「修了書」の発行が形骸化することのないよう、実質的なキャリアパスを具体的に支援することが必要である。

研究活動面については、強力なリーダーシップのもと、さまざまな種類の会合が多数開催され、地政学などの実態的な研究と、文学・絵画などの表象的な研究について、それぞれの進捗が認められる。今後、学際的な研究の成果を更に展開させることが望まれる。

補助金の適切かつ効果的使用については、本プログラムの目的に沿い、若手研究者の雇用に十分に充当されており、適切である。

留意事項への対応については、本プログラムの趣旨に鑑み、若手研究者のキャリアパスを確立するための取組みが今後も期待される。

今後の展望については、本プログラム終了後の、次世代リーダーの育成を念頭に置いた長期的な研究推進戦略が必要である。